

もう七月が過ぎようとしている。今年は梅雨らしい日々が無かったような気がする。つまり毎日明るいのだ。

鬱陶しい日々が続くのが大体、梅雨時の毎日だ。お天気も大分サマ変わりつつあるのか、日々同じような日課で、夏がいつの間にかちゃんとやって来ているのだ。

子供の頃は学校があるので季節がはっきりしていた。今はすでに歳も九十を過ぎて、もうすぐ百に近い。ということとは、ちょっと変な気がする。つまり実感がないのだ。仕事らしいことを何もしていないことも大いにそのわけだ。

つまり生きていくということは、何かしているということだ。その何かが、今は何もないのが、つまり虚無ということがその実体だ。死んでしまえば、全く同じことなのだろう。

しかし、季節の移ろいは日々生きている限り実体験しているのだから、文字通りありがたい。これもありがたいのが、当たり前になっていて不感症に近い毎日を送っているから、昔風に云うなら、バチ当たりに近い人生なのだろう。

朝夕、仏壇に向かつて、つまり先祖の霊に般若心経を唱えながらお祈りするのが、今のうちにせざるの毎日の務めだ。